



飲み水が できるところまで

川崎市上下水道局

水源からご家庭の蛇口まで

川崎市の水道水源は富士山麓の山中湖を源とする相模川水系の相模湖・津久井湖です。これらの水源から取水した原水を、市内北部の長沢浄水場で24時間休むことなく浄水処理を行うことにより、飲み水ができあがります。

平成24年3月の潮見台浄水場廃止、平成28年3月の生田浄水場の上水における浄水機能廃止に伴い、水を作る能力は1日25万2,600m³となっています。このほかに酒匂川と相模川から取水している神奈川県内広域水道企業団からの受水50万5,600m³を含め、1日に最大75万8,200m³の飲み水を皆さまのご家庭にお届けできる体制を整備しています。

また、飲み水のほかに工場などへ工業用水を供給し、臨海部を中心とした産業活動を支えています。

浄水場では原水に含まれる泥や砂、動植物性プランクトンなどを、凝集薬品を入れて大きなかたまりにして沈でん池で取り除きます。沈でん池で取り除けない小さな不純物はろ過池でこして取り除きます。最後に塩素で殺菌消毒してようやく飲み水となります。

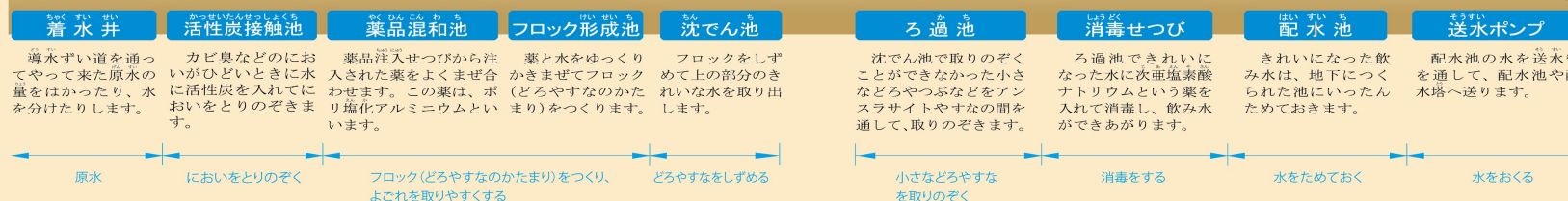
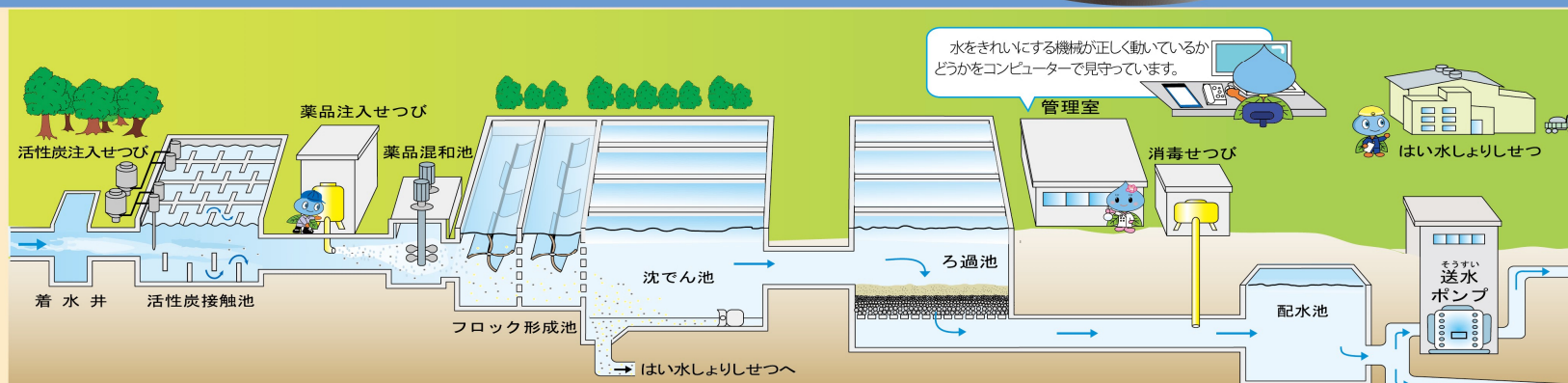
水道水は、法律で定められた「水道水の水質基準」である51項目とそれ以外にも農薬など合計124項目（令和4年度）を、安全な水を供給するために確認しています。

このように非常に厳しいチェック体制で、「安全でおいしい飲み水」を皆さまのご家庭にお届けしています。

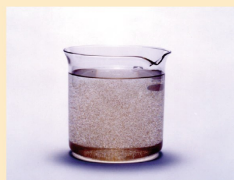
また、非常時においても飲み水が確保できるように、令和4年度には全254か所の「災害時応急給水拠点」の設置が完了しており、現在は、配水池・配水塔と供給レートの耐震化が完了した市立小中学校を対象に、職員による開設が不要な応急給水拠点の整備を進めています。

飲み水ができるまで

浄水場のはたらき



着水井の水



フロック形成池の水



沈でんが終わった水



ろ過した水

はい水しよりしせつ

はい水しよりしせつでは、沈でん池やろ過池から出たどろ水を集め、脱水しています。脱水してできた土はセメントの材料などに使われます。





川崎水道 の歩み



川崎市上下水道局

川崎水道の歩み

川崎の最初の用水は江戸幕府開幕以前の慶長2年(1597年)、のちにこの地方の代官となった小泉次太夫が、多摩川の水を農地に供給するため開削を始めた稲毛・二ヶ領用水で、完成まで14年あまりの歳月を費やしています。

大正10年7月、多摩川の宮内から取水した水を戸手浄水場で浄水処理し、川崎町へ給水したことから川崎水道の歩みが始まります。また、大型の工場が増え続け、工業用水の需要が増大したため、市内木月、鹿島田、北加瀬地区にさく井群を築き、昭和12年7月に平間浄水場から工業用水を送り始めました。全国に先駆けて、公営工業用水道として会社に水を供給するという新たな時代が始まりました。

昭和13年5月には、稲田水源地と滅菌施設などの近代的な施設を備えた生田浄水場を築造し、給水を開始しました。そして、昭和19年の生田第2浄水場(現在の生田浄水場)と菅さく井群の完成で、さらに安定した水の供給ができるようになりました。その後、戸手浄水場は役目を終え、現在は幸区役所として生まれ変わっています。

戦後、急速な人口の増加と工業の発展に伴い、増え続ける水道と工業用水の需要に対処するため、相模川水系の水源開発に参画しました。昭和27年5月には第1導水ずい道で長沢浄水場へ、昭和45年7月には第2導水ずい道で潮見台浄水場へ原水を送り始めました。その源は富士山の麓の山中湖で、忍野八海など支流の水を集めて桂川となり、開発を行った相模湖(相模ダム)、津久井湖(城山ダム)を経由して川崎へ送られました。また、長沢浄水場からは臨海部の工業地域へ工業用水の送水も始まり、平間浄水場を経て工業地帯へ送り始めました。

その後、さらなる水需要の増大で水源地を酒匂川に求め、神奈川県、横浜市及び横須賀市と共に神奈川県内広域水道企業団を設立し、丹沢湖(三保ダム)の開発に参画しました。神奈川県内広域水道企業団では、構成団体のさらなる水需要増大に対応するため、宮ヶ瀬湖(宮ヶ瀬ダム)の開発にも参画しました。

こうして川崎の水道は、市域の拡大、人口の急増、産業の発展など、川崎の成長を支えてきましたが、近年では、産業構造の変化や家庭における節水機器の普及などにより、水需要が横ばいの状況が続いています。そこで、浄水場の統廃合により適正な事業規模へのダウンサイジ

ングを行う再構築事業を、全国に先駆けて完了させました。(なお、文中の平間浄水場は平成15年1月に廃止、また、再構築事業により生田浄水場は平成28年3月に上水の浄水機能を廃止して、工業用水道専用の浄水場となっています。)

給水開始100年を超え、これからも良質で安全な水を安定して供給することで、川崎の輝く未来に貢献していきます。

《年表》

慶長16年 稲毛・川崎二ヶ領用水が完成
明治22年 川崎町が誕生
大正 8年 水道を引く工事が許可され、多摩川の水を宮内(今の中原区)で取り入れるため、戸手浄水場の建設工事を開始

戸手
浄水
場



10年 創設事業完了(大正8～10年)
町宮水道が完成し、通水開始
11年 大師河原村、御幸村、田島村へ給水開始
13年 川崎町、大師町、御幸村が合併し、川崎市が誕生(人口50,188人)
15年 第1期拡張事業完了(大正14～15年)
昭和 2年 田島町を編入
5年 市の人口が10万人を超える
6年 第2期拡張事業完了(昭和5～6年)
8年 中原町を編入
12年 平間浄水場が完成し、全国初の公営工業用水の一部通水を開始
高津町、日吉村の一部、橘村を編入
13年 生田第1浄水場が完成
稲田町、向丘村、宮前村、生田村を編入
工業用水道の創設事業完了(昭和11～14年)
柿生村、岡上村を編入

15年 相模川河水統制事業(昭和15～24年)開始
16年 太平洋戦争開戦
18年 菅さく井・生田第2浄水場(現在の生田浄水場)が完成
20年 市内の中心部が上空襲を受け、4月15日から19日まで全市断水
第4期拡張事業を中断
太平洋戦争終戦
22年 相模ダムが完成し、相模湖が誕生
23年 第4期拡張事業を再開
27年 第1導水ずい道が完成
29年 長沢浄水場が完成

長沢
浄水
場
(建設当時)



30年 末吉配水池が完成
31年 第4期拡張事業完了(昭和17～31年)
32年 市の人口が50万人を超える
33年 相模川総合開発事業(昭和33～40年)開始
39年 第5期拡張事業完了(昭和32～39年)
雨が降らず、およそ1か月間給水制限
40年 城山ダムが完成し、津久井湖が誕生
42年 鷺沼配水池が完成
43年 第6期拡張事業完了(昭和37～43年)
戸出浄水場を廃止
第2導水ずい道が完成
44年 神奈川県、横浜市、横須賀市及び川崎市により神奈川県内広域水道企業団を設立
酒匂川総合開発事業(昭和44～54年)開始
潮見台浄水場が完成
46年 第7期拡張事業完了(昭和40～46年)
47年 政令指定都市に移行
48年 市の人口が100万人を超える

49年 企業団受水を開始(酒匂川水系からの受水を開始)
52年 黒川配水池が完成
53年 三保ダムが完成し、丹沢湖が誕生
56年 第8期拡張事業完了(昭和46～56年)
60年 黒川高区配水池が完成
平成 7年 阪神・淡路大震災(神戸市へ職員を派遣)
12年 宮ヶ瀬ダムが完成し、宮ヶ瀬湖が誕生
16年 小水力発電(江ヶ崎)の運転を開始
新潟県中越地震(新潟県小千谷市へ職員を派遣)
18年 鷺沼プール跡地にカッパーク鷺沼(広場、フットサル場、小学校、保育園)がオープン
小水力発電(鷺沼)の運転を開始
19年 川崎・東京登戸連絡管及び川崎・東京町田連絡管が完成
新潟県中越沖地震(新潟県柏崎市へ職員を派遣)
23年 東日本大震災(千葉県市川市等へ職員を派遣)
24年 潮見台浄水場の浄水機能廃止
28年 生田浄水場の上水の浄水機能廃止
長沢浄水場再構築完成
熊本地震(熊本市へ職員を派遣)
29年 市の人口が150万人を超える
再構築事業完了(平成20～29年)
長沢浄水場広報施設(水とかがやく未来館)開場
令和 3年 給水開始から100年を迎える

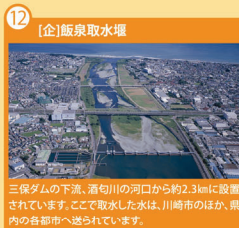
長沢
浄水
場



水源と主要水道施設



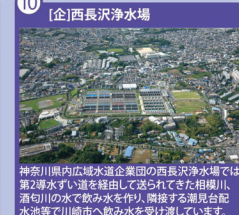
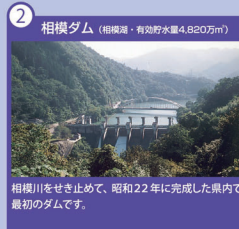
酒匂川水系



【企】:神奈川県内広域水道企業団

神奈川県内広域水道企業団は川崎市、神奈川県、横浜市、横須賀市が水道用水の広域的有効利用、重複投資の回避、施設の効率的配置と管理及び国の補助金の導入を図ることを目的に昭和44年に共同で設立した団体です。

相模川水系



配水池、配水塔、小水力発電

配水池や配水塔は、浄水場で作られた飲み水を一時貯めておき、時間帯によって異なる市民の水の使い方に合わせて水量をコントロールする施設です。配水池は全部で7か所あり、配水塔は市の北西部丘陵地帯を中心に5か所あります。小水力発電は、浄水場から配水池へ流れる水道水のエネルギーを利用するものです。

